ガラテヤ人への手紙 3:1-3（テーマ別研究）——「優先順位」、2026年11月15日

I. ようこそ

A. おはよう。おはようございます！今朝、皆さんと再び集まることができて嬉しい。今日、主が私たちのために用意してくださっているすべてのことを楽しみにしているし、皆さんもそうであることを願っている。

1. *初めてお越しの方、ようこそ。*

B. それでは、小学生の子供たちを日曜学校へ送り出そう。

C. 今朝は、ヨハネの福音書を通した体系的な学びを一旦休んで、主が私の心に置かれたと感じていることを皆と分かち合いたいと思う。

1. 2週間前、私はこの教会の他の数人の兄弟たちと共に、毎年恒例の「カルバリー・チャペル・ジャパン 主任牧師・リーダー会議」に出席するため、東京へ行った。

a. これは、日本各地のカルバリー・チャペルの牧師や指導者たちが集まり、交わり、祈り、礼拝、そして神の御言葉の学びを共にする毎年恒例の大会だ。

b. 私にとって、これは毎年楽しみにしている行事だ。

c. 今年は、アメリカから数名のゲストスピーカーが招かれた。その一人であるホランド・デイヴィス牧師は、実際に私たちと一緒に岩国に戻り、先週、説教壇からメッセージを語ってくれた。

i. それは主からの素晴らしい御言葉であり、ホランド牧師は私たちが礼拝し仕える神について、また神に匹敵する神はいないということを改めて思い出させてくれた。

d. 私たちが参加したカンファレンスのテーマは「御霊によって始まった」であり、ガラテヤ人への手紙第3章1〜3節に基づいていた。

e. カンファレンスの間、私たちは歩みを続け、神が私たち自身や奉仕する教会の中で御心を成し遂げられるようにと、励まされ、勇気づけられた。優先順位を堅持することには、特に重点が置かれていた。

i. 神の御霊に導かれ、神の御言葉に従うこと。私たちが取り組むすべてのことに、神の愛が示されること。キリストにとどまり、キリストと密接な交わりを保つこと。

ii. 謙虚で教えを受け入れる姿勢を保ち、主に頼り続けることの必要性。素晴らしい集会であり、私に多くのことを考えさせた。

2. 先週の金曜日、11月13日は、カルバリー・チャペル岩国にとって、この地域社会への奉仕がまた一年続いた日となった。この教会は21年前、マイク・シルバ牧師の居間から始まり、今日のような教会へと成長した。

a. そして主は私たちに実に忠実であられた。長年にわたり、多くの変化を目の当たりに

してきた。PCSのシーズンのおかげで、毎年平均して会衆の約

3分の1ほどが去っていくが、神は常に新しい人々を導いてくださる。

b. 長年にわたり、様々なミニストリーを率いるために多くの人が名乗りを上げてきた。その中には継続しているものもあれば、そうでないものもある。私たちは、ミニストリーには神が特定の方法で働きたいと願われる「季節」があり、やがてその季節は終わりを迎えるということを学んだ。また、神が成し遂げたいと願うミニストリーのために、長年にわたり主とその導きを信頼することを学んだのだ。

c. この教会が経験してきた絶え間ない変化の中でも、主は変わることなくおられる。主は御自分の民と、御言葉の約束に対して忠実であられた。主は御自身の御心に従って教会に人々を加え、長年にわたり実に驚くべき御業を成し遂げてこられた。

3. ご存知の方もいるかもしれないが、カルバリー・チャペル岩国は、1960年代後半から1970年代初頭にかけての「イエス・ムーブメント」にそのルーツを持つ、非教派の教会だ。

a. この運動から、主にチャック・スミスという牧師の働きを通じて、カルバリー・チャペル全体が誕生した。

b. チャック牧師は、神を愛し、神の御言葉を愛し、神の民を愛した人物だった。彼が牧会したカルバリー・チャペル・コスタメサは、神の恵みによる素晴らしい働きとして花開き、やがて世界中に1,800以上の教会やミニストリーが設立されるに至った。

c. チャック牧師は2013年10月、主のもとへ帰った。その同じ年、私と家族は、マイク・シルバ牧師がここ岩国で始めた働きを引き継ぐため、岩国へ移り住んだ。

d. チャック牧師の逝去以来、彼が牧会していたカルバリー・チャペル・コスタメサには数人の牧師が就任し、その教会を異なる方向へと導いてきた。

e. 2週間前、私たちが「カルバリー・チャペル・ジャパン」の牧師・リーダー会議に出席していた際、カルバリー・チャペル・コスタメサの現牧師が、創設以来カルバリー・チャペル運動の一部であったいくつかの特徴的な点から離れることを発表した。

f. これについてあまり多くを語るつもりはなかった。なぜなら、皆さんの多くは、アメリカ本国のカルバリー・チャペル運動内で何が起きているのか、おそらくご存じないだろうと思っていたからだ。

    i. カルバリー岩国を「ホーム」と呼ぶ皆さんの多くは、必ずしもカルバリー・チャペルのバックグラウンドを持っているわけではないが、岩国にいる間、神様があなたを植えてくださったこの場所で、私たちとつながり、成長することを選んでくれたことを、私は知っており、感謝している。

g. ですから、ここ岩国にいる私たちには関係のないことだろうと考え、それらの変化については触れないつもりだった。

h. ところが先週、ある人から声をかけられ、カルバリー・チャペル・コスタメサとのつながりや、彼らが進もうとしている新しい方向性に私たちが賛同しているかどうかを尋ねられ、少し驚いた。

i. 一部の人々は、カルバリー・チャペル・コスタメサがカルバリー・チャペル全体を代表していると誤解している。しかし、そうではない。各カルバリー・チャペルは独立して運営されている教会であり、神の御霊の導きに従って活動する独自の自治権を持っている。

j. カルバリー・チャペル・コスタメサは私たちの代弁者ではなく、また、彼らが向かっている新たな方向性にも同意していない。私たちは、神とその民を愛するという追求において、聖書のページに記された道筋と青写真に忠実に歩み続けるつもりだ。

4. 今回のカンファレンスのテーマ、ここ岩国での宣教活動がまた一年を刻んだこと、そして私たちが進む方向について疑問を抱く人々がいるという事実を踏まえ、私は、長年にわたり私たちを教会として形作ってきた優先事項のいくつかを振り返り、主が再臨されるまで、それらが引き続き私たちを形作り続けることを願って、このメッセージを語るよう導かれたと感じた。

D. 今朝のメッセージはトピック形式となる。普段とは異なる形式だが、主の御心があれば、来週からはヨハネの福音書の学びに戻ることを約束する。

E. 今日の集いでは、まず今年のカルバリー・チャペル・ジャパン大会のテーマ聖句から始め、そこから派生して、神が教会として私たちに求めておられると信じるものの一環として、私たちが築き上げてきた様々な優先事項について語っていきたい。

F. そこで、今朝聖書をお持ちの方は、ガラテヤ人への手紙から始めますが、その後、新約聖書の中から、今日の私たちを形作ってきた優先事項を明らかにしているいくつかの重要な箇所を取り上げていきます。聖書をガラテヤ人への手紙第3章を開いてください。

1. ガラテヤ人への手紙の中で、使徒パウロは第3章において教会に対して厳しい言葉を投げかけている。そこで、まずパウロの言葉を読み、そこから主が私たちに語っておられると私が信じることに話を広げていきたい。

2. 今朝の出発点は、ガラテヤ人への手紙3章1〜3節だ。ガラテヤ人への手紙は新約聖書の中では比較的短い書物であり、パウロの手紙の一つである。コリント人への第一・第二の手紙の後に位置し、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙の前にある。見つけたら、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がってほしい。

3. 今朝の学びのタイトルは、単に「**<u>優先順位</u>**」だ。私が自分の聖書から読むので、皆さんも自分の聖書で追ってほしい。パウロはガラテヤの教会に次のように書いている……（*R & P*）

II. はじめに；

A. ガラテヤ地方の教会は、美しく素晴らしい始まりを遂げた。その始まりについては、『使

徒行伝』の

第13章と第14章に記されている。使徒パウロが仲間のバルナバと共にこの地を訪れ、イエス・キリストの福音と神の恵みを宣べ伝えたのだ。

1. 彼らの歩みは、私たちの多くが主との歩みを始めたのと同じように、信仰による恵み、すなわち神の聖霊による真の働きによって始まったのだ。
2. しかし、ガラテヤの教会たちは、キリストへの信仰の単純さから背を向けてしまったようだった。彼らは大きな可能性と希望を持って始まったが、時が経つにつれ、状況は変わり始めた。
3. 愚かにも、彼らはキリストへの信仰の単純さから背き始めていた。彼らは御霊によって、聖霊の美しい御業として歩み始めたが、その道を捨て、肉の様々な行いによって完全になろうとしていたのだ。
4. 堕落した人間である私たちは、自分の肉に頼り、自分の手段に目を向ける傾向がある。主から与えられたものを、自分なりの色付けをしてしまうのだ。
5. ガラテヤの教会は、神の御霊による美しい働きとして始まった。聖霊は彼らに罪を自覚させ、彼らは単純な信仰をもってそれに応え、救いへの神の恵みを受けた。
6. しかし、信仰において成長し成熟しようと努めるうちに、彼らは自分の肉、自分の手段、自分の行いに目を向け始め、さらには完全になるための手段として律法に立ち返るようになった。
7. 彼らは、教会が築かれた基盤である単純な真理を捨て去りつつあった。御霊の働きを捨て、肉の行いに目を向けていたのだ。そして、これは私たちも心に留めておくべきことだ。私たちの中に非難の余地がない者は一人もおらず、誰もが容易に同じ過ちに流されかねない。
    a. 御霊と御霊への信頼を捨て、その代わりに、自分の考え、自分のアイデア、自分の計画へと向かうのだ。まるで、主との歩みを振り返り、「もうすべてを理解した。ここからは自分だけでやっていける」と考えてしまうかのようだ。
    b. そして、私たちがたいていやってしまうのは、もともととても単純で美しいはずだったものを、大混乱に陥らせてしまうことだ。私たちの生活に自由をもたらすはずだったものを、神が決して意図していなかったような束縛へと変えてしまうのだ。

B. そこで、今朝私がしたいのは、教会の始まりを振り返ることだ。教会は聖霊の働きとして始まった。これはガラテヤの教会にも、1世紀のエルサレムの教会にも当てはまり、これまで設立された神を敬うあらゆる教会にも当てはまるはずだ。
    1. 私は過去を振り返り、教会の始まりに何が起きていたかをいくつか指摘したい。そしてそこから、彼らが持っていた優先順位を理解し、それらの優先順位が、今日もなお教会を動かすべき同じ優先順位であるべき理由を明らかにしたい。

2. 私たちは、御霊の働きとして始まったものが、引き続き御霊の働きであり続けることを確かめたい。それを肉の働きに変えたり、神が教会として私たちに続けてほしいと望まれる方法にそぐわないものにしてはならない。

C. それでは、『使徒行伝』第1章から始めよう。そこでは、教会がどのように始まったかについて、いくつかの点に注目していく。

III. 使徒行伝1章4〜5節、8節；

A. 使徒行伝第1章4節と5節を見てみよう。*これはイエスが天に昇られる前の出来事だ。イエスはエルサレムで弟子たちと集まり、私たちが従うべき道にとって極めて重要な、非常に具体的な指示を与えた。*（***朗読***）

1. イエスは弟子たちに待つよう命じられた。すなわち、父の約束、すなわち聖霊の到来を待つようにと。

2. イエスは以前、弟子たちに、ご自身が彼らのもとを去らなければならないこと、しかしそれが彼らにとって益となることを語っていた。

3. イエスはこう言われた。「しかし、わたしはあなたがたに真実を告げる。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益となる。もしわたしが去って行かなければ、助け主はあなたがたのところに来ない。しかし、もしわたしが去れば、わたしが彼をあなたがたのところに遣わす。そして、彼が来ると、世を罪と、義と、さばきとについて責める。」（**ヨハネ16:7-8**）

4. 13節と14節で、イエスはこう言われた。「しかし、真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださる。御霊は、ご自身から語ることはなく、聞いたことをすべて語り、また、来るべきことをあなたがたに告げてくださる。御霊はわたしを栄光に輝かせてくださる。なぜなら、御霊はわたしのものを取り、それをあなたがたに告げてくださるからだ。」（**ヨハネ16:13-14**）

5. 聖霊は、助け手として教会に遣わされた。私たちを導き、真理へと導き入れ、私たちの行うすべてのことがキリストに栄光をもたらすようにするためである。

6. そして、これが、メモを取ることを好む皆さんのために、私がまず指摘しておきたい最優先事項だ。私たちは、教会として、**聖霊を待ち望まなければならない**。

7. 私たちは主より先を行くことはできない。聖霊が関わっていないことに、私たちが関与してはならない。私たちが何をするにせよ、それが聖霊の導きによる直接的な結果であることを確実にしなければならない。

8. 聖霊が導いていないことは、何一つ行いたくないのだ。

   a. ただ「やるためだけに」物事に没頭してしまうのは、実に簡単だ。良いこと、称賛に値すること、神を敬うこと、神が私たちに望んでおられると信じるようなこと。

b. しかし、もし聖霊がその活動を導いておられないなら、それは多くの場合、単なる「肉の働き」に過ぎない。たとえ良いことであっても、聖霊に導かれていなければ、肉の働きとなり得るのだ。

c. だからこそ、私たちは聖霊の導きに耳を傾けているか、確認しなければならない。聖霊を待ち望むのだ。聖霊が動かれる時、私たちも

。そして、主が動かないときは、私たちも動かないのだ。

d. つまり、ただやるためだけに物事を行うことに抵抗することを学ばなければならない。特定の人々、特定の活動、特定の奉仕に対して「ノー」と言うことを学ばなければならない。なぜなら、主がその特定の方向へと導いておられないからだ。

9. 教会としてやりたいことは山ほどある。成し遂げられる働きもあれば、始められる奉仕もあり、踏み出せる信仰の一歩もある。しかし、もし聖霊がそれらの事柄において私たちを導いておられないなら、それらは真の御霊の働きではなく、肉の働きになってしまう危険にさらされるのだ。

10. 御霊によって始めた以上、御霊によって歩み続けなければならない。

B. 8節を見てほしい。そこには、聖霊の必要性と、私たちが歩むべき道について、もう一つの重要な指摘がある。（***朗読***）

1. 弟子たちは、聖霊の力を与えられるために、聖霊を待ち望むよう命じられた。

2. 教会として、私たちが行うことはすべて、聖霊に導かれているだけでなく、**聖霊の力に支えられている**ことを確かめたい。

3. 神の御霊が働いているところには、その同じ神の御霊が力を与えてくださると信じている。私たちは自分の力だけで活動したくない。聖霊の力によって活動したいのだ。

4. 自分の力で活動していると気づく時、奉仕の働きは消耗が激しく、充実感もなく、重荷に感じられるようになる。私たちは聖霊から力を与えられなければならない。

5. 聖霊に導かれ、聖霊の力を与えられている限り、燃え尽き症候群に陥ることはない。なぜなら、私たちの弱さの中にあっても、神の力は完全なものとなるからだ。

6. 主はパウロに、御自身の恵みは十分であり、神の力は弱さの中でこそ完全なものとなると告げられた。だからこそ、パウロは「私が弱い時にこそ、私は強い」と書くことができたのだ（**IIコリント12:10b**）。

7. パウロは主ご自身から力を与えられていた。そして私たちもまた、聖霊の働きを通して与えられる力と権能によって行動しなければならない。

C. 使徒行伝1章8節で、イエスは聖霊が私たちに証人となる力を与えてくださると約束された。これは、マタイの福音書に見られる、私たちが考慮すべきもう一つの優先事項へと私を導く。皆でマタイの福音書第28章を開こう。

IV. マタイによる福音書28章18〜20節；

A. 18〜20節を一緒に読もう。これは聖書の中でも非常に有名な箇所であり、一般に「大宣教命令」と呼ばれている。イエスは天に昇り、弟子たちが聖霊を待つことになる前に、

。（***朗読***）

1. 「大宣教命令」には様々な行動が含まれているが、その全体を貫く指令、つまり命令形（命令であるという意味）で書かれている動詞は、「弟子とする」と訳される「聞く」という動詞である。

2. 大宣教命令とは、弟子を作ることだ。繰り返そう。大宣教命令とは、弟子を作ることだ。大宣教命令は「弟子を作ることも含まれる」のではなく、*まさに「弟子を作ること」そのものなのだ*。この点を強調することは非常に重要だと考える。

   a. 一部の人々は、大宣教命令とは単に外に出て福音を宣べ伝えることだと誤解している。つまり、誰かに福音を伝えることこそが、大宣教命令を果たすために必要なすべてのことだと考えているのだ。

      i. 誰かに福音を伝えることは素晴らしいことだが、それは大宣教命令の一面に過ぎない。イエスの命令は、単にメッセージを伝えることではなかった。

   b. また、大宣教命令は改宗者を生み出すよう命じたものでもない。もし福音を伝え、聖霊がその人を責め、その人が福音に応答し、イエス・キリストへの救いの信仰に至ったなら、それは素晴らしいことだ。

      i. その一端を担えることは素晴らしいことだ。しかし、それだけでは大宣教命令の成就とは言えない。

3. 大宣教命令の成就とは、**弟子を作ることだ**。これこそが、イエスがご自身の弟子たちに命じたことであり、彼らの奉仕における最優先事項であり、イエスが彼らをそのために備えさせてきたことだった。

   a. 私の辞書では、弟子とは「与えられた教えを受け入れ、それを自らの行動規範とする信奉者」と定義されている。

      i. イエス・キリストの弟子とは、単にイエス・キリストの教えを受け入れるだけでなく、その教えに従って人生を歩む者のことだ。彼らの行動、つまり人生における言動は、キリストによって導かれている。

4. イエスは、弟子を作るというこの驚くべき任務を成し遂げるために、私たちがすべき二つのことを挙げた。

   a. 第一に、私たちは弟子たちを「父と子と聖霊の名によって」バプテスマを授けなければならない。

      i. これは、私たちの信仰を外部に示すために行う水による洗礼を指している。
      それは、イエスの死、埋葬、そして復活に対する私たちの信仰と、それらとの結びつきを象徴するものである。

      ii. バプテスマは、イエスの死、埋葬、そして復活を美しく表しているが、同時に、

私たち自身の死、埋葬、そして新しい命への復活を表している。

iii. 古い人は死に、葬られ、そして私たちは水から引き上げられる。これは、キリストにある私たちの新しいいのちを表しているのだ。聖書は

は、「だれでもキリストにあるなら、その人は新しい被造物である。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなった」と教えている。（**IIコリント5:17**）

b. したがって、私たちは弟子たちに洗礼を授けなければならない。第二に、私たちは弟子たちに、イエスが命じられたすべてのことを守るよう教えなければならない。

i. ここカルバリーでは、大宣教命令を果たし、イエス・キリストの弟子を育てるという私たちの義務の一環として、神の御言葉の教えを非常に重要視している。

ii. 聖書の教えの重要性に加え、私たちが聖書を教えるスタイルも重要だ。私たちは、神のすべての戒めを皆に教えたい。

iii. だからこそ、私たちは章ごとに、節ごとに教えていくのだ。何も省略したくない。イエスは、「私が命じたすべてのことを守るように彼らに教えなさい」と言われた。

iv. したがって、私たちは教えたい箇所を都合よく選んだりはしない。ただ一節ずつ着実に進め、最終的にはすべてを網羅するのだ。

5. 弟子を作るという「大宣教命令」について、もう一つ指摘しておきたいことがある。大宣教命令は、私たち全員に向けられたものだ。

a. 私たちは*皆*、大宣教命令を成し遂げるために、それぞれの役割を果たすよう召されている。私たち一人ひとりは、弟子として教えを受ける立場にあるか、あるいは誰かを弟子として育てる立場にあるべきだ。

b. 弟子作りは、大量の読書や宿題を伴う10週間の集中講座のような、形式ばったものである必要はない。

c. 何よりもまず、弟子作りは関係性に基づいている。普段一緒に過ごす人々の弟子となりなさい。あるいは、普段一緒に過ごす兄弟姉妹から教えを受けなさい。

d. 毎週、昼食を兼ねた祈りの集まりや、少人数の聖書勉強会を開こう。自分の人生を他の人と分かち合おう。相手に注ぎ込み、相手からも注ぎ込んでもらおう。

e. 私たちの男性グループは現在、弟子訓練のシリーズに取り組んでおり、他の男性たちとペアを組んで、とてもシンプルなハンドブックを学んでいる。定期的に集まり、主のことや、神が私たちに示してくださっていることについて話し合っている。難しいことではない。

f. 弟子訓練は、決して難解なものではない。ただ、誰かに投資しようと決心すればよいのだ。その人のそばに寄り添い、主との歩みの中で成長できるよう助け、主とその御言葉に従って生きるよう励ましてあげよう。

B. 教会が当初から掲げ、今後も続けていかなければならない優先事項を浮き彫りにしていると

思われる聖書箇所を、もう一つ見てみたい。

V. 使徒行伝2章42～47節；

A. 使徒行伝第2章に戻り、42～47節を見てほしい。ルカ医師は、使徒行伝を執筆する中で、時折、教会に関する要約的な

記述を時折挿入している。それは、1世紀の教会が何を経験していたか、あるいは神がどのように彼らを動かし、用いておられたかについての概括である。この箇所は、1世紀の教会における優先事項と、神が彼らをどのように導いておられたかを説明する、そうした要約の一つだ。（***朗読***）

B. この箇所から、1世紀の教会が設立当初、定期的に行っていた活動を特徴づける4つの主要な活動があったことに注目してほしい。

1. 初代教会は、第一に、使徒たちの教えに堅く従い、
第二に、交わり；第三に、パンを裂くこと；そして第四に、祈りだ。

a. 今朝、これら四つの活動を見ていくにあたり、教会がそれらをどのように行っていたかに注目することが重要だ。この箇所は、彼らがこれら四つの活動すべてに「堅く立ち続けていた」と伝えている。つまり、彼らは粘り強く、揺るぎなく、それらを生き方として完全に献身して行っていたということだ。

2. これらの活動を一つずつ見ていき、1世紀の教会においてそれがどのような姿であったか、また21世紀の教会の一員である私たちにとってどのような姿であるべきかを理解しよう。

C. 彼らは「使徒たちの教え」に堅く従い続けた；

1. 「教義」とは何か。メリアム・ウェブスター辞典による定義では、教義とは「教えられているもの」であり、通常は、ある知識分野や信仰体系における原則、立場、あるいは一連の原則を指す。

2. 聖書の教義とは、神、キリスト、人類、そして教会に関する聖書の記述を中心とした一連の信仰である。

3. したがって、「使徒たちの教え」とは、使徒たちが初期のクリスチャンたちに教えていたことを意味する。

a. この箇所の直前に、ペンテコステの日にペテロが行った教えが記されている。

i. 彼は説教の中で、群衆に向けて、預言者たち、イエスとその地上の働き、十字架上の死、復活、そして私たちの罪深い人生に対するイエスの贖いの力について語った。

ii. また、悔い改め、バプテスマ、罪の赦し、そして聖霊の賜物についても教えた。

iii. 彼はすべての人に救われるよう勧めたところ、その日、約3,000人が教会に加わった。

b. また、マタイ自身の福音書に記されている教えについても知っている。

i. 彼は、イエスがユダヤ人が待ち望んでいたメシアであることを示すために、旧約聖書の箇所を絶えず引用していた。

ii. マタイは、イエスを王として焦点を当て、その御国について教えている。

C. また、最近日曜日の朝に学んできたように、ヨハネの教えについても知っている。

i. ヨハネは、イエスが神の子であることを示そうとした。

ii. 彼は、私たちに対する神の偉大な愛を語り、キリストの神性を強調している。

d. また、使徒パウロが書いた様々な書簡を通じて、彼の教えも受け継いでいる。

4. これらの教えは、どこで見つけることができるだろうか。それは基本的に、新約聖書全体である。使徒たちの教義は、新約聖書のページの中に記されている。

a. また、使徒たちはしばしば預言者を引用し、アブラハム、ダビデ、ソロモンといった旧約聖書の人物の記述を参照していたことを考えると、使徒たちの教義には旧約聖書の教えも含まれていると結論づけられる。

b. したがって、使徒たちの教えとは聖書全体を指すものであり、それは神の言葉そのものである。

c. ですから、初代教会が使徒の教えに堅く従い続けたと記されているとき、それは初代教会が神の御言葉に対して飽くことのない渇望を持っていたということを意味しているのだ。

5. 教会が設立された当初の例を見ると、**神の御言葉の学びが**最優先されていたことがわかる。

6. 神の言葉は初代教会において最優先事項であり、今日の教会においても同様に最優先事項でなければならない。神は今もなお、御言葉の学びと教えを最優先としている。

D. 初代教会は使徒たちの教えを学ぶことに揺るぎなかっただけでなく、交わりにも熱心であった。

1. ここで使われている「交わり」を表す言葉は*「コイノニア」*だ。この言葉は、自分自身を他者と親密に分かち合うことを意味する。

2. これは、私たちが互いに対して示すべき、また持つべき配慮、愛、そして支えを表す言葉だ。

3. 44〜45節には、初期の教会においてこれがどのように彼らの生活の中で現れていたかが記されている。（***朗読***）

a. さて、この話を聞いて、「まるで共産主義のようだ」と思う人もいるかもしれない。しかし、惑わされてはならない。この生き方は完全に自発的で、一時的なものであり、とりわけ愛に動機づけられたものだったのだ。

b. それが義務ではなかったことは確実だ。第5章で、アナニアが聖霊に嘘をつこうとした際、ペテロが彼の土地の売却代金についてこう言ったからだ。「それが手元にある間は、あなた自身のものだったではないか。売った後、その代金はあなたの自由に使えたではないか。なぜ、そのようなことを心に企てたのか。あなたは人に対してではなく、神に対して嘘をついたのだ。」（**使徒行伝5:4**）

c. 物質的な所有物を売り、捧げることは自発的な行為であり、誰にも義務付けられていたわけではない。それは、困っている人々に愛と支援を示したいという単純な願いに過ぎなかったのだ。

4. この原則は、今日の私たちにも当てはまる。所有するものをすべて売り払い、慈善団体にすべてを寄付することではなく、むしろ他者を思いやるという原則のことだ。信徒の共同体における兄弟愛の精神である。

5. 交わりは、初代教会において不可欠な要素だった。それを取り除けば、教会の命にとって壊滅的な打撃となっただろう。そして、それは今日においても同様だ。**互いに交わりを持つことは**、教会の命にとって極めて重要である。

6. 教会、つまりあなたと私は、頻繁に集まり、困っている時には助け合おうとする、互いへの真の愛を持つべきだ。

7. その必要は、経済的なこともあれば、感情的なことも、社会的なこともあるが、ほとんどの場合は霊的なものだ。

   a. キリストは教会と弟子たちについて、「あなたがたが互いに愛し合うなら、世はあなたがたがわたしの弟子であることを知るだろう」と語った（**ヨハネ13:35**）。

8. そして私の願いは、この言葉が私たちの教会家族についても言えるようになることだ。私たちが心から互いを愛し、互いを気遣うこと。人々が私たちの教会を訪れ、ここにいる一人ひとりを通して示される神の愛を知り、感じ取れるようになることだ。

E. 教会は、使徒たちの教えと交わり、そして第三にパンを裂くことに堅く立っていた。さて、パンを裂くことには二つの意味がある。

1. まず第一に、「パンを裂くこと」とは、単に彼らの日常の食事を指していた。46節には、初代教会の人々が家から家へと巡り、パンを裂き、喜びと純粋な心で食事を共にしたと記されている。

   a. 誰かを家に招いて食事を共にする時、何が起こるか知っているか。互いの人生を分かち合うのだ。一緒に話し、一緒に祈り、一緒に笑う。もし私の家に来れば、たいていボードゲームを一緒に遊ぶだろう。

   b. 私たちが喜んで家を開放し、キリストにある兄弟姉妹とパンを分かち合うとき、それは交わりのための素晴らしい機会を生み出すのだ。

      i. 先ほど交わりの重要性を強調したが、パンを裂くことは交わりを持つための素晴らしい手段だ。

   c. 一世紀の教会は、集まってパンを分かち合うことを重視していた。そして、私たちもそれを模範とすべきだと思う。

      i. 長年にわたり、私たちは集まって互いにパンを分かち合うのが好きだから、「カ

ロリー・チャペル」と呼ばれることもあった。

ii. 私たちは定期的に、教会での持ち寄りパーティーや公園でのピクニックなど、教会の仲間が集まる機会を計画するようにしている。

iii. 私たちがそうする理由がある。それは、日曜日の午後に各自で食事を済ませるよりも楽だからではない。多少の計画と手間がかかることは承知しているが、それだけの価値がある。それは交わりを深め、互いを知り、互いに愛し合うための素晴らしい手段だからだ。

d. 初代教会が食事のために集まった際、それはしばしば「アガペーの宴」あるいは「愛の宴」と呼ばれた。

i. それらは教会の一体感を深めることを目的としており、その後に聖餐式が行われることが一般的だった。これが、パンを裂くことに関する第二の理解につながる。

2. 第二に、「パンを裂くこと」は聖餐式に与ることと理解されている。

a. これは、聖餐式の制定について教会に思い出させるためにパウロが与えた指示を見れば、理にかなっている。

b. **コリントの信徒への手紙第一10章16節**で、パウロは次のように書いている。「私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血との交わりではないのか。私たちが裂くパンは、キリストの体との交わりではないのか。」

c. また、コリント人への同じ手紙の中で、パウロは「あなたがたがこのパンを食べ、この杯を飲むたびに、主の死を、主が来られる時まで宣べ伝えているのだ」と宣言している（**Iコリント11:26**）。

d. これらの愛の祝宴は、教会が共に集まって食事を分かち合う時であった。パンとぶどう酒はユダヤ人の食卓では一般的な食べ物であり、これらの愛の祝宴の終わりに、彼らは聖餐式を行うことで主を偲ぶために一息ついた。

3. したがって、ここには二つの意味があることが分かる。**パンを裂くことは**、信者たちにとって交わりの機会であっただけでなく、聖餐に与り、キリストが私たちすべてのために成し遂げてくださったことを思い起こすことでもあったのだ。

F. 続いて、最後に教会が祈りに堅く立ち続けていたことに注目する。

1. 祈りは、私たちと主をつなぐ命綱だ。それは、私たちが創造主であり、救い主であり、主である方と語り合う手段である。

2. 祈りは教会の実践の中で四番目、つまり最後に挙げられたものかもしれないが、優先順位において四番目だったわけではない。

a. 使徒行伝第6章では、使徒たちは、絶えず祈りと御言葉の奉仕に専念できるよう、自分たちが食事の世話をすべきではないと考えた。（**使徒行伝6:4**）

b. 祈りは初代教会において最優先事項であった。祈りと御言葉だ！

3. 教会において、祈りと御言葉が最も重要なものだったというのは、私にとって興味深いことだ。興味深いのは、祈りと御言葉こそが、私たちが主と交わるための最良の手段だからだ。

    a. 主がこのように定められたことは、実に美しい。主は私たちに、御自身の記された御言葉、すなわち私たちの人生に対する御心を授けてくださった。主は、ほとんどの場合、御言葉を通して語られるのだ。

    b. では、私たちは主にどのように応えるのか。それは祈りを通してだ！

    c. 初期の教会において、御言葉と祈りが最優先とされた理由は、彼らが、これこそが主との関係を継続していく方法であると理解していたからだと、私は提案したい。

4. コミュニケーションは、人間関係において最も重要な要素の一つであり、
もしかすると最も重要なものかもしれない。

    a. 健全な関係とは、率直で誠実なコミュニケーションに満ちた関係だ。

    b. それは、配偶者との関係、家族との関係、友人との関係、そして何よりも主との関係において当てはまる。

5. したがって、教会は祈り、すなわち主との率直なコミュニケーションに積極的に関わる必要があることがここからは分かる。

6. ここカルバリー岩国では、グループで祈りを捧げるための様々な機会を設けている。

    a. 水曜日の夜には、御言葉の学びの後に、祈りと小グループの時間を設けている。

    b. また、教会では隔週の木曜日の朝に祈りの会を開いており、そこでキリストの体である一人ひとりの名前を挙げて、皆のために祈っている。

        i. ご自身やご家族の写真を喜んで送ってくださった方々のために、祈りのカードを作成した。片面には皆さんの写真が、裏面にはお名前が記載されている。

        ii. 皆さんの生活で何が起きているかを知らなくても、私たちは皆さんのために祈っている。ただ、神様が皆さんのために働いてくださり、導き、導き、そして皆さんを通して働いてくださるよう願っているのだ。

        iii. ちなみに、まだ家族写真を送っていないが送りたいという方は、prayer@calvaryiwakuni.com 宛てに、お名前を明記したメールに写真を添付して送ってくれれば、カードを作成し、リストに加える。

7. **祈りは、**私たちの教会にとって切実に**必要なものだ**。これは決して疎かにできない最優先事項である。祈りこそが、私たちが主と交わり、主との関係を深め続けるための道なのだ。

G. 最後に、御霊に導かれ、御霊の力を与えられ、弟子作り一筋に専念し、

御言葉と交わりとパンを裂くことと祈りに堅く立ち続けた教会から生まれた成果について、触れておきたい。

1. 私たちが同じ道を歩むとき、まさにこのような姿が見られることを願っている。
    a. 主への畏れがすべての人の心に臨んだ（**43節**）。
    b. 使徒たちを通して多くの不思議としるしがなされた（**同43節**）。
    c. 教会は互いに気遣い、他者の必要に目を向けていた（**44-45節**）。
    d. 教会は心を一つにして一致していた（**46節**）。
    e. 主への賛美が捧げられた（**47節**）。
    f. 教会はすべての人々から好意を寄せられた（**47節も同様**）。
    g. そして何より重要なこととして、主は毎日、救われる人々を教会に加えられた（**これも47節**）。
2. 教会に人々を加えていくのは神の仕事であり、私たちの仕事ではない。神はご自身の教会を築く方法を知っておられる。そして、神にはそれを成し遂げる完全な力がある。
3. 私たちの責任は、単に御霊に導かれ、御霊の力を得て、忠実に弟子を作り、御言葉に深く入り込み、互いに交わり、共にパンを裂き、共に祈ることにある。
    a. そして、結果は神の御手に委ねるのだ。神が適切と見なされるままに、加えたり、取り去ったりされるのを任せるのだ。
    b. 私たちは、御霊の働きとして始まったこの働きが、肉の働きではなく、引き続き御霊の働きであり続けることを願っている。
    c. 私たちは主に導かれ、主に力を与えられたい。教会として神が与えてくださった優先事項に焦点を当てたい。
    d. そして残りのことは神に委ね、神が偉大な方であるからこそ、偉大な御業を成し遂げてくださることを信頼する。アーメン？　アーメン。祈ろう。